『宣教師ニコライの全日記』における青森県地域・人物等に関する言及

木　鎌　耕一郎

本資料は，全9巻からなる中村健之介編訳『宣教師ニコライの全日記』（教文館，2007年）の中に見られる青森県地域・人物等に関する言及を抜粋し，時系列にまとめたものである。これと同じ紀要に掲載する論文「八戸の正教徒源晟の政治活動」を執筆する準備のために作成した表であるが，ニコライの二度の青森県来訪の様子や，青森県地域で働いた伝教者たちの具体的な活動をまとまった形で眺めるために有用であり，上記論文と合わせて参照できるように資料として掲載することにした。『宣教師ニコライの全日記』の記述に加え，八戸の正教徒パウェル源の政治活動に関連する事項についても盛り込んでいる。

なお，ニコライは日記の日付を原則としてロシア暦（ユリウス暦）で記しており，邦訳では監訳者によってユリウス暦を記載した後に（　）内に西暦を記している。本資料では，他の関連事項とのつながりを意識して，西暦の日付のみを載せた。また『宣教師ニコライの全日記』からの抜粋の後の（　）内に，邦訳の巻と頁を記した。表は時系列的に関連項目を箇条書きにしており，◇印は『宣教師ニコライの全日記』からの抜粋，●印はその他の文献からの情報を示している。

資料　『宣教師ニコライの全日記』における青森県地域・人物等に関する言及および関連事項

西暦	明治	日付	記載内容
1876	9	10月	●八戸光栄会が八戸堤町に設けられ，源晟，伴義丸，関春茂ら26人が沢辺神父により受洗。「三戸教会ハ景況ナリ，又八戸伴美丸ト云フ者甚タ尽力スルノ様子ニテ，已テニ教会ヲ立ントセリ」（『公会議事録』新編八戸市史近現代資料編Ⅰ　p. 275）
1877	10	7月	●東京の伝教学校で学んだパウェル源は，7月の公会で副伝教者として八戸を担当することになる。 ●八戸光栄会の様子。「作明治九年十一月，領洗者二十六名，今年三月ニ至リ，領洗者十名，啓蒙ヲ受ル者一名，皆保羅神父ヨリ之ヲ領ケリ，今又教会ニ集マルモノ二十名余ノ内，十名程領洗ヲ望ム，亦一週間ニ二回伊望伴ノ宅ニ於テ講釈セシニ，女三四名集マレリ，該地ノ景況ハ一時勃興スルニ至ラサレトモ又必ス盛大ニ至タルノ時アラン」（『公会議事録』新編八戸市史近現代資料編Ⅰ　p. 276） ●パウェル源の母，アンナ源ヤヨが逝去（死の前に受洗）。
1878	11	4月 7月 11/6	●パウェル源，下総地域（千葉県）の伝教者となる。 ●パウェル源，秋田地方の伝教者となる。 ●堤町に2階建ての教会堂が建つ。
1879	12	7月	●パウェル源，大槌（岩手県）の伝教者となる。

八戸学院大学健康医療学部人間健康学科

西暦	明治	日付	記載内容
1880	13	4 月	● 八戸で政治結社「暢伸社」が設立される。設立メンバーに八戸光栄会のマルク関春茂，パウェル白井毅一，アンドレイ井河元寿がおり，後にパウェル源も加わる。
1881	14		● 八戸光栄会の現況は「会堂一講義所三聴者三十余」。また，パウェル源が埋葬して罰金を科されている。「正式ヲ以テ死者ヲ埋葬シタル科ニヨリパワェル源購罪金二円五拾銭申付ケラル」（「明治 14 年議事録」新編八戸市史近現代資料編Ⅰ　p. 278） ● 産馬騒擾事件。暢伸社は産馬仕方金の民間運営を求める産馬維持共会の分離派を支持する。
		5/30	◇福島の伝教に派遣されたペトル伴（八戸出身）に関する記述。「ここには伝教者として，有能な者がいないので仕方なく，ペトル伴が派遣されてきた。かれは怠け者だったので，正教について知りたいと思ってくる人たちに，適切な知識を与えて満足させることができなかった。それなのに，かれは来る者すべてに洗礼を施したり，少なくとも啓蒙者に仕立て上げてしまった」（2 巻，p. 20）
		6/15	◇ニコライが盛岡から福岡に向かう途中，「一戸で出迎えの人たちを見つけた。福岡からモイセイ下斗米，八戸から伝教者のパウェル源，三戸からニキタ佐藤である」（2 巻，p. 56）
		6/16	◇ニコライは福岡から八戸へ向かう。馬淵川沿いの旅の描写，三戸の伝教の経緯と教会の現状について。「三戸で伝教を始めたのは一〇年前に函館から派遣されてきたスピリドン大島。かれはこの教会のために多大の貢献をした。いまは亡くなったペトル河村はかれから教理を聴いた。いまかれから聴教した者のうち残っているのはただ一人，ニキフォル今田だけである。当時キリスト教徒に加えられた迫害がかれの聴教者たちを四散させてしまったのだ」（2 巻 pp. 58-59） ◇三戸出身の伝教者ステファン江刺家の家族のこと，同じく三戸出身のポルカリプ石井が八戸で歌を教えていること，三戸の執事たちが伝教者としてパウェル源の派遣を所望していることなど。相内村からステファン江刺家に変わり，パウェル源がニコライに同行（2 巻 p. 60） ◇八戸の教会の歴史，現況，関連人物に関する最も充実した記録（2 巻 pp. 61-63） ◇「八戸の伝教はパウェル源を介して始まった。かれは盛岡にいたころ，イアコフ高屋から正教について聴いた。かれは八戸に帰ると，友人の伴と相談して，一緒に函館の宣教団に正教関係の書物を送ってくれるように依頼した。当時アナトリイ師のもとにいた丹野が書物を送り，これらを源と伴はかれらの周りに集まった二〇人ほどの人たちとともに読み始めた。その後，八戸にイオアン酒井が立ち寄り，全部で三日，かれらに教理を説明した。それからペトル朽木が伝教者としてこの地に派遣されて来て，一年滞在した。明治九年にパウェル沢辺神父が八戸で最初の信徒たちを洗礼した。サワ山崎が伝教者としてこの地に明治一一年と一二年に滞在した。それからステファン江刺家が昨年の公会までいた。昨年のその公会でパウェル源が当地に任命された。」（2 巻 p. 61） ◇「現在，源が行なっている伝教の概要」として，①「月の四の日と九の日に女性を相手にルカに因る聖福音の講義」を源宅で実施，②「毎週月曜」にルカ中里宅で「マトフェイ〔マタイ〕に因る聖福音の講義」，「源の指導のもとに輪講」，③「五の日」には「ロマ人に達する書〔ローマの信徒への手紙〕の講義」を教会にて，④「七の日には夜，魚町で伝教のために借りた家の二階で伝教が行なわれた」。このうち③と④はこの日記の時点で中断している（2 巻 p. 61） ◇教会の建築経緯を詳論。人物について，「八戸出身の伝教者は，一，パウェル源　二，ペトル伴　三，イアコフ久保　四，オニシム中野」の他，八戸出身で「伝教学校で学んだことのある者」などを紹介している。「伝教者になることを望んでいるアンドレイ井河と，胸の病気のために伝教を諦めたパウェル片山，それにペトル坂本，金持ちのルカ中里の弟で，結核で亡くなったイオアン中里らである。ペトル佐藤もここの出である。彼は伝教学校で学んだことはないが，以前伝教活動をしていたことがある。いま彼はここで選ばれて教会の会計として勤めている。概して教会に対してたいへん誠実に尽くし，伝教活動の手助けをしている。イオアン川崎もここの出身。かれは伝教学校で学び，教会の書記を勤めていたが，残念ながら先ごろ永眠した。八戸の執事は二人，マトフェイ近藤とアファナシイ川口である」（2 巻 p. 62） ◇ニコライは八戸では「元の家老で，藩侯の血筋にあたる」ルカ中里の家に宿泊（2 巻 p. 62） ◇信徒を訪問。「一，源。かれの家はごく普通の士族の家で，かなり古いように見えた。家族構成は八三歳になる老婆と妻と二人のこども――　一二歳と六歳　――，これに本人を加えて総計五人である。「あの子が家にいないと困る」と老婆は言うが，源のほうは「家族が丈夫なうちは，一年でも二年でも，教会が行けと言えば他所へでも行けます」と言う。　二，イアコフ久保の父。自分の弟のアンドレイ川崎を神学校にどうかと言う。弟が川崎姓を名乗っているのは，イオアン川崎の跡取りになったからだ。かれは函館の宣教団の学校で三年間学んだことがある。しかし，イアコフ久保の父親自身はまだ異教徒である。どうやら内証は豊からしい。それにかれはまだとても若い。

西暦	明治	日付	記載内容
			三，アンドレイ井河。伝教者にしてくれという。わたしはまずもう一度伝教学校に入り直すように言っておいた。その他――　ここの者で伝教学校に入りたがっているのはニコライ赤岡，二七歳。以前伝教学校にいたことのあるイエザカの兄である。神学校へはポリカルプ石井（八戸出身）も望んでいる」（2 巻 p. 63）
		6/17	◇ニコライはステファン江刺家を連れて八戸を発ち，萊満山の山中の一軒家で宿泊（2 巻 p. 63）
		6/18	◇大湯，荒川村，毛馬内で，ステファン江刺家が伝教に携わったこと（2 巻 pp. 64-65） ◇花輪，尾去沢銅山，曲田の伝教にステファン江刺家に関わったこと，同地には昨年の公会でペトル伴が任命され「初めてここに住むようになった」こと，再び伴について「怠け者」と評価（2 巻 p. 66-68）
		6/21	◇山田の教会について。ステファン江刺家が昨年の公会以来，伝教者として派遣されている（2 巻 p. 70）
		6/22	◇大槌の教会について。「一昨年の公会でパウェル源がここに任命され，一年いた」（2 巻 p. 72），「教会の資金は四〇円ある。昨年，源のときに信徒たちが持ち寄って作ったのである」（2 巻 p. 73）
1882	15	1/19	◇前日（1/18）に前橋のスピリドン大島が，伝教者二人の補充を依願したことから，アンドレイ井河（八戸出身）とロマン千葉が，翌日（1/20）に派遣されることになる（2 巻 p. 96）
1886	19	2 月	● 青森県議会第五回半数改選選挙で三戸郡（定員 5 名）からパウェル源晟が県会議員に初当選する。
		8/27	◇東京の神学校で学ぶ八戸出身の川崎（源）圭蔵の名がでてくる。「どうやら，ロシアには小西〔増太郎〕や川崎〔圭蔵〕のような，もう少し年かさの者を送ったほうがよさそうだ」（2 巻 p. 226）
1887	20		● アンドレイ源圭蔵がペテルブルク神学大学に留学する。
1888	21	2 月	● 青森県議会第六回半数改選選挙で，マルク関春茂が三戸郡から県会議員に初当選する。
		12/6	● 青森県鍋島知事による「無神経事件」。7 月 28 日官報の「本件如きやや無神経の人民なれども」という記述に端を発して，知事弾劾が始まる。知事を非難する「上書」を記した三戸郡有志総代の中に源晟，関春茂の名がある（『青森県議会史　自明治元年至明治二十三年』p. 753） ● 東奥義塾関係者によって「東奥日報」紙が創刊されるが，創立メンバーにパウェル源も入っている（同上 p. 754）
1889	22	4/4	◇各地の司祭や伝教者から寄せられる金の無心を憂う文脈で，「パウェル源もロマン福井も同じようになにもしていないくせに，宣教団から生活費だけは受け取る。しかもその額は馬鹿にならない」（2 巻 p. 253）
		10/22	● 八戸で政治結社「土曜会」発会式。源晟，関春茂らが演壇に立った（『青森県議会史　自明治元年至明治二十三年』p. 770）
		9/2	◇ペトル伴について。「伝教者ペトル伴とイリヤ佐藤（伊豆）への手紙を口述。給与を満額支給した向こう二ヵ月間に無為を改め，活動の証を示さないならば，一一月からは給与は半分に減らす，ということ」（2 巻 p. 272）
		不詳	◇仙台と盛岡での「布教会」の集会参加にあたり，同地域の各地区の教役者とその給与をリストアップ。 ◇八戸出身の「ペトル伴」が「気仙沼，只越」を担当し，給与が「一四円五〇銭」と記されている（2 巻 p. 278） ◇「八戸，三本木」は「エリセイ加藤」が担当で，給与は「一〇円＋四円（加費）家賃一円五〇銭」（2 巻 p. 279）
		10/9	◇気仙沼の教会について。「伴〔伝教者〕が信徒に話をしている。土曜日には一五人くらい，日曜には二〇人くらい。礼拝のあと，聖書の講釈を行っている」（2 巻 p. 286-287） ◇只越の状況について。ニコライは気仙沼から伝教に来ているペトル伴の活動が芳しくないことを嘆いている。「伴はこの地方のことをよく知っていると言っているのだが，かれらは伴を支持していない。別の者が良いと思う」，「ペトル伴は怠け者の見本である」，「このような男をどうしたものか，わたしにはわからない」（2 巻 p. 287）
		10/12	◇盛岡での集会にて，「八戸の代議員ニカノル井河（アンドレイの弟）」による八戸の現況報告。「オニシム中野」がバプテスト派のプロテスタントになったことなど（2 巻 p. 293-294）

西暦	明治	日付	記載内容
			◇「執事は三人。そのうちマルク関は最も熱心。村長である。祈祷に集まるのは土曜も日曜も七人。きわめて少ない。エリセイと関と源と拙者が信徒を冷淡にしてしまったのです，目覚めさせようとしているのですが，うまくいきません，と言う。やり方がまずいのだ」（2 巻 p. 293）
			◇「八戸から一五里の湊には源と井河が出入りしている。そこには六人の新しい聴教者がいる」（2 巻 p. 293）
		10/13	◇盛岡での集会にて，「ペトル伴は怠けていたので減俸とする」，「一四円五〇銭から七円二五銭まで減らす。しかし，司祭の願いにより，さらに半減することにする。つまり，かれへの給与は三円五〇銭とすることになった」（2 巻 p. 296）
			◇「布教員」の任命について。八戸はニカノル井河。おそらく気仙沼にペトル伴（2 巻 p. 297）
1890	23	2 月	● 青森県議会半数改選選挙で，源晟が再選。
		11/10	● 源晟が，臨時県会において県会議員副議長に当選する。
1891	24	4 月	● 帝国議会の「地価修正案」に対して，青森県では全県的反対運動が起こり，源晟，関春茂も加わる。奥羽六県非地価同盟大会に青森県から派遣する委員 3 名の中に源晟が選ばれている（青森県議会史　自明治二十四年至大正元年 p. 53-54）
		8/21	● 府県制施行後の最初の青森県会議員選挙で三戸郡（定員 6 名）から，源晟と関春茂が共にトップ当選する。
		9/25	● 第 1 回臨時県会で，源晟が議長に当選する。
1893	26	5/1	● 府県制施行後の最初の県会議員半数改選選挙で，関春茂が三戸郡から再選する。
		5/13	◇三戸と八戸の現況。ニコライは八戸のイアコフ久保の家に宿泊する（3 巻 p. 288-290）
			◇ニコライが福岡から三戸に向かうと，相内に住むステファン江刺家らに出迎えられる。「彼らは何年かの間信仰から離れていたのだ。かれらのなかでキリスト教の炎は消えておらず，日常の苦労と仕事の灰の下に保存されていたのだ。江刺家はまだ酒飲みらしい。というのもきょうかれはひどく酒臭かったからだ」（3 巻 p. 288）
			◇三戸と田子について。「公会の後，この二つの場所のためだけに伝教者を置くべきである。いまでは冷淡さから立ち直った元伝教者ステファン江刺家といまでは地元でたいへん金持ちの千葉家に養子に入った古田島と誦経者学校を出たニキタ佐藤は，いろいろと伝教者を手助けすると約束している。ステファン江刺家は最近まで近郊で群長として働いており，ここでは尊敬されている。それはなおさら伝道する助けとなるだろう」（3 巻 p. 288）
			◇三戸から八戸への移動に際して，「八戸からは以前の伝教者であり現在は青森の県議会の議長，つまり県会議員長であるパウェル源〔晟〕が迎えにきてくれた」（3 巻 p. 289）
			◇八戸の教会堂について。「四〇坪の土地に二階建の独立家屋として建てられている。土地は異教徒のものであり，かれに四円借料として払っている。建てられたのは，一部は地元の信徒から，一部は他の土地の信徒から集めたお金で，かつてはここの伝教者であったサワ山崎〔兼三郎〕の努力による。建物は大きい。下は伝教者の住まいで，上は教会であるが，天井がたいへん低く，一一年前にここに来たときには，わたしはずっとかがんでいなければならなかった。現在では，信徒たちは一五円集め，そのために至聖所の上の天井の一部をすこし外側に上げた。だからわたしは好きなだけまっすぐ立てる場所があった。この建築作業は終わったばかりだったので，信徒たちはボリス〔山村雄五郎〕神父にまず最初に改修した部分を聖別するよう頼んだ」（3 巻 p. 289）
			◇八戸の教勢について。「メトリカによると，ここでの受洗者は一三八人，そのうち現在は他の土地にいる者が三〇人，亡くなったのが二九人，信仰に冷淡になった者が九人，プロテスタントに改宗した者が六人である。現在は六四人がここに残っており，他の教会で洗礼を受けた者が一人いるので全部で六五人である。新しい聴教者が八人。奉神礼には日曜に一〇人ほどが，土曜にはそれより少人数が集まる。日曜には，男性よりも女性が多い。ここでは女性と男性のそれぞれの集会が，伝教者エリセイ加藤〔雄之助〕によって行われていた。パウェル〔源晟〕の娘で，宣教団の女学校を卒業し，いまでは神学士〔ペテルブルグ神学大学卒〕のアンドレイ源（川崎〔圭蔵〕）と結婚したマリヤ源がここに住んでいたときには，女性の集会は定期的に行われていた。その当時は，たいてい一〇人ほどの女性が集まる毎月行なわれる集会で，マリヤは『聖歴史』から話したり，祈祷などを説明したりしていた。（中略）マリヤが昨年結婚し，夫とともに東京に去ってからは，集会を再開して続けるつもりではあるが，集会は中断された」（3 巻 p. 289-290）
		5/14	◇ニコライは八戸で四人に洗礼をさずける。病気で遅れた五人目は下田村の「伝教者ペトル伴〔義丸〕の妹」（3 巻 p. 290）

西暦	明治	日付	記載内容
			◇八戸の社会状況について。「一度にいくつかの事故が起こったという。二日前に大きな火事があり，四〇〇軒ほどの家が焼けた。信徒のうち多くはまだこのことで奔走しているか，または火事で疲れて休んでいるかである。昨晩には三〇万の資金があると言われているある金持ちの質屋が強盗に殺された。かれは元伝教者の白井の妻の伯父である。いまは六人ほどがそこの家であらゆる仕事に走り回っている。さらに千島列島に向かう陸軍省の某高官がきょう町を通る。その高官はそこで屯田兵を募集して連隊を組織するのだという。町ではこの人をもてなすことになっている。それでまた何人かの信徒が忙しい思いをしている」（3 巻 p. 290） ◇信徒の家々を訪問し，その貧しさを憂いている。「ここの信徒は貧乏人である。元伝教者で裕福に暮らしているアンドレイ井河を除いて，他にも二，三軒は貧しくはないが，残りのみなは貧しく，またたいへん貧しい人もいる」（3 巻 p. 291） ◇ニコライが男性と女性の「講義会」を開催するよう説き，定期的に行われることが決まる（3 巻 p. 288）
		5/15	◇ニコライは八戸から三本木へ移動。三本木の宿に宿泊（3 巻 p. 291-293） ◇井河について。「ここの教会で最も良い人々でありだれよりも教会の面倒を見ているアンドレイ井河とニカノル井河が，とくにニカノル井河が，ここの教会のために，司祭が来た時に聖体礼儀が行なえるように祭服と聖器物一式を与えてほしいと頼んできた」（3 巻 p. 291） ◇八戸の担当司祭について。「あまりにも広すぎるボリス〔山村〕神父の教区を，二つに分けることが考えられるからである。もしかすると，ここには他の司祭が来るかもしれない」（3 巻 p. 291） ◇三本木の教会について。「たったの三年ほど前に始まったばかりである。メトリカによると，受洗者は二四人，そのうち二人は現在は他の土地におり，残りの二二人はここにいて，一〇軒の家に住んでいる」（3 巻 p. 292） ◇三本木の伝教者は「岩間〔宇助。ワシリイ〕」（3 巻 p. 292）
		5/16	◇ニコライはボリス山村神父とともに三本木から野辺地まで馬車で，野辺地から青森まで鉄道（二等車）で青森へ向かう。パウェル源ら信徒から「華々しく」迎えられ，パウェル源の家に宿泊。「泊まるところはパウェル源が自分のところに用意してくれ，妻ワルワラとともにたいへん親切に迎えてくれた」（3 巻 p. 293-295） ◇仰々しく 15 台の人力車で町を練るが，実際の信徒は少なく，その理由として（おそらくパウェル源が）「ここは見栄っ張りの町ですから。たとえばカトリックも自分たちの司教を迎えるときにはみなが迎えに出ます」と説明する（3 巻 p. 294） ◇青森の教会について。「メトリカによるとここでの受洗者は四八人。そのうちよその土地にいる者が二一人，亡くなったのが四人，カトリックに改宗したのが五人からなる一家族，残りは一八人である。八戸から来たパウェル源〔晟〕の家族が五人，弘前から一人，よって全部で二四人が現在教会に所属しており，そのうち成人男性が七人，女性が三人，残りはこどもたちである。信徒の家は六軒である」（3 巻 p. 294） ◇伝教者シメオン松原清は，1889 年には岩手県の金成，1893 年の途中まで岩手県の一関周辺を担当していたが，ニコライが 1893 年 5 月に青森を訪れた際には，彼は青森の担当だったようである（3 巻 p. 294）。出身は秋田県の高清水とされる（3 巻 p. 340）。当初ニコライは彼の能力を買っていたふしがある（「概して，シメオン松原はしっかりした伝教者だ。元気はいいし，力量もある」（2 巻 p. 289），「司祭に任命する人物を見つけなければならない。わたしが考慮に入れているのはシメオン松原〔清〕である」（3 巻 p. 285））。ニコライの日記からは，松原が 1911 年 9 月にはまだ青森の教会を担当していたことがわかる。松原はニコライに頻繁に手紙を書いたようで，日記で度々取り上げられる。
		5/17	◇ニコライは青森で「パウェル源〔晟〕のところでわれわれは朝食をすすめられ」，朝食後に浪岡まで馬車で，浪岡から黒石まで人力車で移動する（3 巻 p. 295-296） ◇黒石の伝教者は「イオアン小寺〔徳〕」（3 巻 p. 295） ◇黒石の教会について。「ここでの受洗者は二〇人だけ。そのうち，今他の土地にいるのは四人，亡くなったのは一人。残りの一五人はみなここにおり，七軒の家に住んでいる。そのうち三軒はみなが信徒でそれぞれの家に三人ずつである。一五人の信徒のうち九人が男性，三人が女性，三人がこどもである。新しい聴教者は二人で，そのうち一人はあす洗礼を受けることになっている」（3 巻 p. 295）
		5/18	◇ニコライは午前中に黒石の信徒の家を訪問した後，午後に人力車で弘前を訪れ，三時過ぎに弘前からほぼ徒歩で碇ヶ関に向かい宿泊（3 巻 p. 296-297） ◇弘前を担当するペトル伴（八戸出身）とのやり取りについて詳述される。信徒は「二名」で聴教者が「五人」しかいないにもかかわらず「空っぽの部屋に立っている教会のイコンを要求し，だれも読む人がいないのにたくさんの本を要求している」ことをニコライは咎め，伴が「ここではキリスト教はプロテスタントによってのみ知られています。

西暦	明治	日付	記載内容
			プロテスタントがやっているように演説をしなければなりません」と語るとニコライは「我慢できず，伴をこっぴどく叱った」。ニコライは「演説」をプロテスタントの「忌まわしく空っぽなおしゃべり」と捉えている（3 巻 p. 297）
		5/28	◇ニコライは岩手県の瀬田を出発して遠野を訪問。遠野の最初の伝教者がパウェル源との記述がある。「以前伝教者であったパウェル源〔晟〕は，最初にここで伝道をはじめた。坂下は源の教え子である」（3 巻 p. 315）
		6/19	● 青森県議会の議長選出選挙で，源晟が再選される。
1894	27	1 月	● 東北本線知内駅から支線の八戸線が開通。県会議員の源晟と関春茂が，支線の招致のため地元の調整に尽力したことが知られている。（『青森県議会史　自明治二十四年至大正元年』p. 95-96，『新編八戸市史近現代資料編 I』p. 351-354）
		3/1	● 第 3 回衆議院議員選挙が行なわれ，青森県第一区で源晟が自由党から当選する。
		4/29	◇復活大祭の日の記録。客人の中にパウェル源の名がある。「わたしの部屋と編集室で二回に分けでの精進落としとなる。部外の者としては長郷のところの四人，岡村〔竹四郎〕とこどもたちを連れたワルワラ〔岡本政子〕，北海道から一人，籠沢から一人，パウェル源〔晟〕，かれは国会議員で，以前伝教者であった。〔書記の〕沢辺と藤沢が客に対応した」（9 巻 p. 322）
		9/1	● 第 4 回衆議院選挙があり，第一区で源晟が革新自由党から当選。
1895	28	6/2	◇源圭蔵についての記述。「神学大学の卒業生である教師のアンドレイ源は，生徒の作文の採点をいい加減にするので，苛立たしい。ろくでもない作文にたいし〔最高点の〕五点，考えが最も明晰で機知に富む者（沢出，伝教学校在学）には二点，しかも「明晰ではない」との評点つきで，注意まで書かれている。それでわたしは源に厳しく注意し，作文をもう一度読ませ，その評点を直させた」（4 巻 p. 11）
		6/29	◇源圭蔵についての記述。「伝教学校の低学年は，アンドレイ源の道徳神学の試験があって，わたしはそれに立ち会ったが，生徒たちはよく答えていた」（4 巻 p. 31）
		7/21	◇パウェル源についての記述。「正午過ぎに客が来た。たとえば，以前は伝教者をしていた，そしていまは国会議員のパウェル源（源によれば，現在国会では正教徒の議員は四人，プロテスタントは九人，カトリックの議員はいないそうだ）」（4 巻 p. 48）
		8/25	◇パウェル源についての記述。「夕方にパウェル源が訪ねてきた。女生徒たちが塔ノ沢から帰ってきたら，そこに一ヵ月いかせていただきたいとわたしに頼んだ。パウェル源は心臓に脂肪が沈着する病気に苦しんでいるので，医者は転地療養を勧めているそうだ。〔塔ノ沢の管理人の〕ミヘイ〔日比〕に，源が塔ノ沢でしばらく過ごすという内容の手紙を書くことを約束した」（4 巻 p. 60）「塔ノ沢」は正教会が利用している箱根の施設。
		9/19	◇八戸の伝教者「イオアン伊藤」の訃報。「（八戸の伝教者の）イオアン伊藤〔譲策〕死す」。翌日（9/20），チフスが死因であるとの手紙が届く（4 巻 p. 74）
		9/21	◇アンドレイ源に関する記述。「ペトル石亀は，次号の『心海』用の記事を校閲のために持ってきた。かれは，アンドレイ源とパンテレイモン佐藤はぜんぜん文章が書けないし，それに加えて才能もないと不平をこぼしていた。ペトルは，テーマにかなっていないために完全に書き直されたアンドレイの記事を見せてくれた。パンテレイモンのも同じである。どうしたらよいだろうか」（4 巻 p. 75）
			◇三戸出身のポリカルプ石井周太に関する記述。札幌の伝教者コンスタンチン大村が「女性関係で自分の名誉を汚した」という記述の後，「同じような理由で自分の名を汚したポリカルプ石井には，桜井神父は嫁としてヴィラを見つけてやった。彼女は輔祭のパウェル高橋の妹で，わたしたちの女学校の卒業生だ。うまくいきますように」（4 巻 p. 76）
		9/27	◇八戸の伝教者イオアン伊藤の葬儀に関する記述。「ペトル笹川神父とボリス山村神父が，信徒の出生死亡の報告と伝教者のイオアン伊藤の葬儀について報告してきた。イオアンは三戸で病に冒されたが，力を失って倒れるまで長い間こらえて，熱心に働いた。かれはほうとうに熱心な信徒，そして伝教者であった。イオアンの葬儀には，付近に住む信徒たちとかれと最も親しい伝教者たちが集まった。ちょうどボリス神父は〔教会巡回中で〕近くに来ていたので，葬儀にも参列した。葬儀はできるかぎり盛大に行われた。そこにいる全員がほんとうに悲しく思い，真摯な祈りを捧げた」（4 巻 p. 78-79）
		9/22	◇亡くなった伝教者イオアン伊藤の代わりに，八王子を担当するイリヤ谷地政夫（大館の出身）が八戸赴任をニコライに希望する（4 巻 p. 83）。希望が受け入れられたことが，同年 10 月 19 日付日記からわかる。「イリヤ谷地は八王子の教会をワルナワ清水に引き継ぎ，八戸と三本木に行く途中でここに立ち寄った」（4 巻 p. 90）
1896	29	3/30	◇八戸出身のアレクサンドル細川虎五郎に関する記述。「アレクサンドル細川〔虎五郎〕から，水沢と前沢についてうれしい手紙。かれは，アヴラアム八木〔精治〕や近隣の伝教者と力をあわせ，非常識きわまりない新興宗教の天理教を追い払った。水沢で七人，

西暦	明治	日付	記載内容
			前沢で一人を洗礼した，という。伝教学校在学中のかれの言動は感心しなかったが，もしかしたら立派な伝教者になるかもしれない」（4 巻 p. 164）
		4/29	◇青森担当の伝教者シメオン松原からの手紙の紹介。「イサイヤ近藤」という人物が，自身も非常に貧しいにもかかわらず貧窮者を救い，チフスで亡くなったことを知らせたもの。ニコライは，「まさに聖人の一生を垣間見るようだ」「わたしはこの手紙に感激し，読み終わるとすぐに教会のベルを鳴らして教室からダヴィドらを呼び出すと，日本にも立派な信徒がいることを証明するこの手紙を生徒の前で読み上げよと命じた」と記している（4 巻 p. 174）
		6/16	◇青森の信徒から伝教者のシメオン松原の給与アップの陳情についての記述（4 巻 p. 192）。これ以降，松原から加給を求める手紙がたびたびあり，ニコライは彼に対する印象を悪くしている（たとえば，4 巻 p. 301，5 巻 p. 41，6 巻 p. 52，6 巻 p. 176，7 巻 p. 298 など）。
1897	30	2/4	◇三戸出身のポルカルプ石井に関する記述。「ニコライ桜井神父が，稚内の伝教者ポリカルプ石井が結婚したので，かれの給与を二円上げてほしいと頼んできた。結婚が決まれば，という条件でわたしは前にこのことを約束していた。許可しよう」（4 巻 p. 306）
		3/27	◇同上。「蝦夷島〔北海道〕稚内の伝教者ポリカルプ石井が，自らの布教状況を誇る手紙を送ってきた。「司祭がお越しになれば，一〇名の洗礼式があげられるでしょう」と書かれている。そうなりますように！」（4 巻 p. 333）
		4/29	◇八戸出身のアレクサンドル細川虎五郎に関する記述。「ボリス山村神父は，塙の伝教者アレクサンドル細川にたいして領聖を授けなかった，と報告してきた。細川が酒を飲んでいるためだ。細川は伝教学校への入学前，それから学校でもときどき飲んでいたに相違ないという。かれのもとには新たな聴教者は一人もおらず，教会も傾く一方であるとのこと。細川を塙からはずさないといけない」（4 巻 p. 350）
		6/29	◇同上。「ボリス山村神父が，自らの教区巡察を報告してきた。塙では伝教者を代えてくれと頼まれたそうだ。アレクサンドル細川はなんの役にも立たないという。ところで，細川は現在，塙にいない。郷里の八戸で結婚した。これからは役に立つ伝教者になるかもしれない」（4 巻 p. 379）
		11/7	◇アンドレイ源に関する記述。「最近，まったく思いがけなく，媒酌人となったアンドレイ源の尽力のおかげで，パウェルはルキナと結婚することができた」（5 巻 p. 62）
1898	31	3/15	●明治 30 年 12 月の衆議院解散により，第 6 回衆議院議員選挙が行なわれる。青森県第一区で源晟は落選。
		6/17	◇ニコライは函館の途上，東北本線の青森駅で降りてシメオン松原らの出迎えを受ける。「午前八時半，青森に到着。伝教者シメオン松原〔清〕が信徒一人（仕立屋のパウェル）を連れて駅で迎えてくれた。一〇時に函館行の汽船が出港する予定だったので，埠頭から遠く離れている教会へ行く時間はなかった。それで旅館へ行って四人全員で和食を食べた。帰りに教会を訪ねるとシメオンに約束して，わたしとセルゲイ師は汽船に向かった」（5 巻 p. 154）
		6/18	◇函館の教会で，ペトル山縣神父を支持する信徒と支持しない信徒との分裂が起こり，ニコライが収拾しにやってきた。ペトル神父の「味方」の人物の一人に「アレクサンドル細川」の名がある（5 巻 p. 155）
		6/21	◇ニコライが函館からの帰りに青森へ寄る。青森の教会の様子がわかる記述がある。「二時半に青森に着いた。埠頭で伝教者シメオン松原〔清〕と信徒たちが迎えてくれた。伝教者松原がその熱意で建てた教会堂に行った。かれは小さな土地を借りて，売りに出されていた小さくて手ごろな学校の建物を買うと，それを借りた土地に運んできて建てた。それでいま，たいへん立派な教会堂があるのだ」（5 巻 p. 159） ◇八戸の信徒である関春茂に関する記述。息子が正教神学校で学んだことがわかる。「病気になってしまった神学生関の父親（いま青森の「県会議員」をしている）も来た」（5 巻 p. 159）
		8/6	◇ニコライとセルゲイが函館を視察。函館の教会にて「伝教者アレクサンドル細川〔虎五郎〕が説教をした」（5 巻 p. 181）
		8/10	●6/10 の衆議院解散を受けて行われた衆議院議員選挙で，源晟は第一区から立候補したが落選した。
		8/24	◇函館からの帰途，青森にて。「青森では伝教者シメオン松原〔清〕と信徒たち数人が波止場に迎えにきていたが，そのままかれらと鉄道の駅に直行する羽目になった。汽船がまったく遅れてしまったからで，（中略）あとになってわたしは，なぜ青森に一晩泊まって信徒と祈祷を行ない，人々に説教しなかったのかと良心がとがめた」（5 巻 p. 193）
		12/23	◇アンドレイ源に関する記述。「午前中神学校の試験を見てきた。合計一八人の三年生は，一般史の試験で成績が悪かった。教師のアンドレイ源〔圭蔵。旧姓川崎〕はペテルブルグの神学大学を卒業しているのに，生徒たちと同様，歴史がわかっていない。みん

西暦	明治	日付	記載内容
			なの前で，教え方が悪いと叱った」（5 巻 p. 234）
		12/26	◇アンドレイ源に関する記述。「朝，神学校の試験に立ち会った。教師の〔アンドレイ〕源が教えている六年生八人が聖書の「創世記」を解説したが，出来はあまりよくなかった」（5 巻 p. 235）
1899	32	7/1	◇アンドレイ源が神学校教師を辞す。「試験を終えて部屋にもどると，サンクト・ペテルブルグ神学大学を卒業し，ここの神学校の教師をしているアンドレイ源〔圭蔵〕が来て，教役者の職を解いてほしいと頼んだ。父親が金を要求しており，神学校の職〈月に三五円〉よりも高額の俸給を得られる職をかれのために探してきたという。父のパウェル源（アンドレイの養父。養子になる前のアンドレイの姓は川崎）も以前伝教者だったが，やはり教役者の職を辞めた，というより，辞めさせられたと言ったほうがよいだろう。かれは何年間も伝教者としての給料を受け取りながら，八戸や青森で市の選挙に関わる世俗の仕事に従事し，教会の金を悪用していたのだ。わたしはかれを解雇する権限を持っていないと言って，かれの解雇をはっきりと拒絶した。なぜならかれは教会に奉仕するために教会で養育され，かれのために数千円の教会の金が使われた。教会に奉仕するという約束で神学校に入学し，教会に奉仕するという約束で〔ロシアの神学〕大学へ送られたのだ。いまかれがこれらの約束に反して教会への奉仕をやめるなら，かれは神の前に罪を犯し，人々にたいして恥知らずな行為をすることになる。もしかれとかれの父が罪と恥知らずな行為で自らの名誉を汚したいなら，わたしはそれを力ずくで止めることはできない。しかし，そのことに対しても許しも祝福も与えない。わたしのもとから去って神学校にもどると，アンドレイ源は同僚の教師たちに教役を辞めると断言した（どこかで雇われの通訳になるために）。こういうわけで，わたしが神学大学に入学させた一二人のうち，六人がすでにいなくない，教会の仕事に留まっているのは六人だけだ。いなくなった六人のうち二人は死亡（松井はペテルブルグで，行田はここで），四人は裏切り，去って行った。他の六人が長続きするかどうかはだれにもわからない！　（中略）それゆえ，今後〔ロシアの〕神学大学にはおそらくだれも派遣しない。今回の裏切り者である源の穴は，今年の卒業生のうちのだれかが簡単に埋めることができる。源は頭がわるく，同級生のだれよりも無能だった。教えるといっても，ただ「ここからここまで」と宿題を与えるだけだ。今年卒業する生徒のトップであるニコン松田や須田のほうが，うまく教えられる」（5 巻 p. 317-318）
		7/2	◇アンドレイ源に関する記述。ロシア人の陸軍大佐ワノフスキーが日本人を痛烈に批判したが，「アンドレイ源のきのうの恥ずべき行為のために，わたしはもういつものようには日本人を弁護する事ができなかった。そのうえ，つねに日本人を弁護しているわたしは正しいのか。日本人にはその価値があるのか。教会に奉仕するようにわたしが教育した日本人は数十人どころか何百人といるが，かれらがみなわたしや教会を裏切らなかっただろうか。しかし，いまいる教役者のうちだれが，機械的にではなく，思慮深く心を込めて教会に仕えているだろうか。そういう人物をわたしは知らない！」（5 巻 p. 318） ◇アンドレイ源の後継の教師に関する記述。「今年の神学校卒業生ペトル須田〔亀治〕とニコン松田〔保治〕の二人のうち，どちらを教師として神学校に残すか，教師たちが話し合って決めるよう，〔校長の〕イオアン・アキーモヴィチ瀬沼に言った。これは退職したアンドレイ源のポストだ」（5 巻 p. 319） ◇アンドレイ源への嘆き。「三井神父は正直な人間であるかもしれない。わたしもかれを正直な人間だと思っている。しかし，アンドレイ源も正直な人間だったではないか。わたしはアンドレイが教会を裏切ることができるとは思ってもみなかった」（5 巻 p. 320）
		10/19	◇パウェル源が賭博で入獄していることについての記述。「朝六時，起きると廊下で話し声が聞こえた。部屋を出ると麹町教会の歌唱者ティト大沢〔定〕に出会った。「お願いがあって参りました。今月分の給料をいただくわけにはいかないでしょうか」「なんのために」「パウェル源〔晟〕を牢獄から保釈してもらうのにかなりの金が要ります。その一部分に充てるためです」「それであなたと家族はひと月どうやって暮らすつもりだ。給料は多くない。たかだか一二円ではないか。源にとってはそんな金は意味がないのに，あなたはまるで一ヵ月一文なしになる。だめだ」それでティトは出て行った。それにしても，パウェル源が入獄しているとは初めて知った。かれが花札賭博で警察につかまったことは，知っていた。かれ自身が葉書で，「好奇心から賭博場へ行ってみたところ，なんたる恥さらしか，つかまった五〇人のなかに入ってしまいました」と知らせてきたからだ。それが一ヵ月半ほど前のことだ。どうやら警察はかれを逮捕しただけでなく，入獄させる理由ありと判断したらしい。きょう沼辺書記に聞いたところでは，源はもう三年このかた，賭博に入れあげているらしい。となれば，自業自得というところだ。それにこれは，教会にたいするかれの恥知らずな行為に神罰が下ったのかもしれない。かれは，自分の養子アンドレイ源（旧姓は川崎〔圭蔵〕）に神学校と神学大学で教役者になるための教育を〔宣教団から〕受けさせてもらったにもかかわらず，すべての約

西暦	明治	日付	記載内容
			束を反故にしてアンドレイを教会から離れさせ，もっと稼げる他の職場〔長崎の領事館の通訳〕へつけてしまったのだから」（6 巻 p. 47） ◇源晟の保釈金を無心したティト大沢定は，青森出身であることが 1893 年 5 月にニコライが青森を訪問した際の日記から知られる。彼が源晟の保釈金のために動いたのは，同郷のよしみで頼まれたからかもしれない。「まだ暗くならないうちに，信徒の家の訪問に出かけた。（中略）建設されたばかりのとくに良い家は，現在誦経者学校にいるティト大沢の父親イオアン大沢のものである。かれの家族はすくないとは言えない。七人のこどもがいる。そのなかには宣教団の女学校にいた一五歳のマリアがおり，いまではすっかり病気から回復していた。イオアンは刑事，つまり探偵として働いており，とても良い人のようだ」（3 巻 p. 294-295）。ティト大沢は，誦経者学校をでてからは東京の麹町教会の誦経者として働いている。「麹町教会の誦経者ティト大沢が来て，俸給を増やしていただきたい（現在は宣教団から一〇円受け取っている）と頼んできた。父が仕事を引退し，金銭的な援助を頼まれたのだそうだ」（4 巻 p. 96）。
		11/13	◇青森に関する記述。「ボリス山村〔雄五郎〕神父からの手紙。蟹田と三厩で布教が成功しそうなのでシメオン松原に現地へ行く交通費を渡してくれるようにとのこと（青森にはもう一人伝教者ニコライ細川がいるので）。かれはまた，シメオンが宿屋に泊らなければならないため，月に五円を要求してきた」（6 巻 p. 55）ここに記されている「ニコライ細川」は「アレクサンドル細川」（八戸出身）の書き間違いであろう。というのも，1901 年 12 月時点で蟹田でアレクサンドル細川が伝教しており（7 巻 p. 67），また 1902（明治 35）年の「公会議事録」に蟹田に赴任していた細川伝教者が病気の妻を連れて八戸に帰ってきた旨が記されているからである。
1900	33	2/21	◇三戸出身で北海道の伝教者ポリカルプ石井〔周太〕から手紙。「教会には日曜学校が不可欠。さもないと，信徒のこどもたちは自らの信仰を知らないまま育ってしまう」と力説している。石井みずから，自分の教会で日曜学校を始めていて，それに使う書籍を三円分，宣教団に注文してきた。かれの意見はまったく正しい」（6 巻 p. 84）
		10/14	◇青森の伝教者シメオン松原に関する記述。「ねだってばかりいる青森の伝教者シメオン松原が，給料の値上げを頼んできた。伝教者のなかでもいちばんもらっているのだが，給料一八円に，持ち家住まいのくせに家賃六円までとっているから，実質二四円である。とはいえ，これ以上せがんでこないように，わたし個人の金から二円あてがった。先例になってしまうから，教会の金をあてるわけにはいかない」（6 巻 p. 176）
1901	34	3/26	◇千葉で長らく伝教者として働いたグレゴリイ神谷藤楠が亡くなり，その「追悼供養」に参列した者たちの中に，アンドレイ源の名がある。「パウェル吉田は，亡くなった伝教者グレゴリイ神谷の追悼供養にだれが参禱したか，教えてくれた。みんな神学校の同級生だ。参禱者と，さらに地方在住の何人かが，毎月，遺児の養育費をだし合うことにした。もちろん金額はたいしたことはない。（中略）神谷の未亡人とこどもにとってなにがしかの援助となるだろうし，神学校卒業生のキリスト教的友情を証明する絶好の機会になるだろう。参禱者の約半数は，教会に仕えるという約束を破った者たちだ（ペトル石亀，アンドレイ源，ダニイル小西，パウェル永野，イアコフ富沢）」（6 巻 p. 247）
		7/27	◇八戸の教会に関する記述。「公会で配置換えした伝教者の留任要請が各地の教会から引きもきらず届く。盛岡からは「イグナティ目時を」。だめだ，その場合八戸にだれを送るのか」（7 巻 p. 14）
		12/16	◇八戸出身のアレクサンドル細川に関する記述。「蟹田のアレクサンドル細川から注目すべき手紙。ヴァサリオン山﨑という鍛冶屋の信徒は，友人の石岡といっしょに一〇年以上前に青森で入信したが，蟹田に来てからは教会とも信徒とも疎遠になり，キリスト教の事は完全に忘れていた。しかし伝教者アレクサンドル細川が着任すると（かれの伝教能力は見劣りするが）ヴァサリオンの信仰心は燃え上がり，いまでは最も熱心な信徒である」（7 巻 p. 67）
1902	35	1/28	◇青森の信徒に関する記述。「青森の信者でステファン土岐が来て，自分の娘を女学校に入学させてほしいと言ってきた。彼女のことは，もう青森の伝教者シメオン松原〔清〕が頼んできている。彼女は一九番目の入学候補生となっている。順番がそこまでくれば，入学が許可されるだろう。この娘は完全な自費生だから大丈夫だろう。土岐はわれわれの女学校を卒業したばかりのヴェラ三浦はすでに青森で学校教師をしているが，その働きぶりは優秀だと語った。同時にヴェラ三浦は信徒たちに聖歌を教えており，二〇名ほどの大人とこどもからなる青森の聖歌隊の指導をしているという」（7 巻 p. 76）
		4/8	◇アレクサンドル細川に関する記述。「ボリス〔山村雄五郎〕神父は管轄教区〔岩手，青森〕の巡回記録のなかで，伝教者アレクサンドル細川〔虎五郎。津軽，蟹田〕の病気の妻の治療費として，どこの信徒が何人くらい寄付したか語っているが，伝教者の名誉のために，その募金の名目をどうするか迷っている。けっきょく，集まった金は三〇円に達したが（それ以外に，本会から一二円送った），ほかの人々にもこうした事例があることを教えるために『正教新報』に載せることにした」（7 巻 p. 100）

西暦	明治	日付	記載内容
		7/16	● 公会においてボリス山村司祭から「パワェル源 外七名」から提出された「八戸教會提出請願『目時傳教者再任派遣の件』」が読まれる。八戸光栄会では「久しく不振の狀態」で新しい信者が出ず，従来の信者も祈祷に来ることが稀になったが，「目時傳教者」が赴任してから「面目を一新」した。目時伝教者は，着任後「青年會を組織し信徒を誘引」し，そこでは異教徒も加わって教えを聞くようになり，洗礼希望者も現われた。ところが，蟹田に赴任していた「細川傳教者」が病気の妻を連れて郷里の八戸に戻ってきたため，目時伝教者が転任せざるをえなくなった。しかし細川伝教者は，両親が病に伏しており，遂には妻子も失い，伝道することもままならない状態である。そのため教会に来る者がなくなってしまった。そこで目時伝教者を再び八戸に派遣してほしいという請願となった。ボリス山村司祭は「予も此の間八戸に参つたが，執事等とも相談し，同教會の先輩たるパフェル源，マルク關などの意見をも聞きたり」と語っている。（『大日本正教会公会議事録（明治 35 年）』p. 99-101）
		8/16	◇ アレクサンドル細川に関する記述。「最近亡くなった妻の実の妹と再婚する許可を与えてほしいと言うアレクサンドル細川〔虎五郎。津軽の伝教者〕の依頼（これはぜったいにだめだ）などである」（7 巻 p. 162）
1903	36	5/26	◇ アレクサンドル細川に関する記述・「ボリス山村〔雄五郎〕神父が，「八戸の伝教者アレクサンドル細川〔虎五郎〕は信者たちの誘惑に屈し，亡くなった妻の妹と同居している」と書いてきている。山村神父はかれに恥ずべき行為をやめ，妹を実家に送り返すように説得したものの，かれは聞き入れてくれないという。山村神父はかれを伝教者から外すことを求めている。もちろん，たったいまアレクサンドル細川には職務怠慢と恥ずべき行為のため，伝教者の職から解任されたことを通知した。
		7/10	◇ パウェル源に関する記述。「八戸では教会の建物に二人の異教徒の女性が住んでいるといった事態が生じている。そのうちの一人は天理教の布教者の妻である。神道と仏教の折衷によるこの新宗教はあまりにも支離滅裂なものであるため，政府も対応に苦慮している。パウェル源〔伝教者〕がこれらの女性を教会に住まわせたのである。この女性とは，源の妻の姉妹と娘であり，その娘が天理教布教者の妻ということらしい。ところが，二階に礼拝室がある教会建物がこうして辱められているというのに，だれ一人気にかける者はいないのである。主よ，あなたはいつになったら慈悲深い目をもってご覧になり，あなたの日本教会に善良な信者をお与えくださるのですか」（7 巻 p. 284）
		7/16	● 公会におけるボリス山村司祭管轄教区からの請願。シメオン松原が「津軽郡内の五所川原町（九百戸）他六ヶ所」に「二名の伝教者の派遣」を求めている。また，三戸のパワェル柴内と八戸のイグナティ目時が転任を希望している。パワェル柴内は「一家の都合」が理由，イグナティ目時の場合は「近時同教会が少しも振はざるため目時兄も大に困り居るなり。これは敢て目時赴任後の事に非ずして数年前より段々斯の如くなりたるなり。若き者が斯の如き地方に居りては却つて失望する位なれば他の働きの出来る地方に転ぜしむる方がよろしかるべし」（『大日本神品公会議事録（明治 36 年）』p. 88-89）と説明されている。この公会の結果，パワェル柴内が八戸に，イグナティ目時が三戸に転任となった。（同 p. 115-116）
		10/26	◇ 青森の伝教者シメオン松原からの手紙。「青森の伝教者ペトル松原〔清〕は，現地の正教にたいするカトリック神父たちの敵対行為について以下のようなことを書いてきた。かれらは手段を選ばず正教信仰をののしり，それを「露教」呼ばわりしている。それどころか，このロシアの信仰は，かれらも容認することのできるギリシャの信仰とは似ても似つかぬものであるため，この「露教」は信者をロシアに帰化させるために張りめぐらされた罠にすぎないことを証明しようとしているという。かれらはこれについての小冊子を作って各所でばらまいている。だがその小冊子がかれらにも損害を与えていることは注目すべきである。というのも，ある官吏は現地でこの小冊子を読み，正教について知りたい，正教徒になりたいという気持ちにさせられたからである」（7 巻 p. 324）
		11/24	◇ アンドレイ源に関する記述。「日本の新聞各紙に正教神学大学を卒業したアンドレイ源〔（川崎）圭蔵〕についての記事が出ている。かれは教会に奉仕するという自らの使命に背き，長崎の領事館に誘われて勤めたものの，そこを解雇されたという。これに関して，ある新聞はその原因を源がロシア軍の機密を日本人に漏らしたからだとしている。これについては，もちろんかれの評判は上々である。おそらく解雇のほんとうの理由は，かれの怠惰と無気力であろう。そもそも領事館にまじめに勤務する能力がかれには欠けていたということだ。このことは長崎領事のガガーリン公爵がわたしとの会話の中で，源のことに触れるたびに口にしていたことである」（7 巻 p. 334）
		12/6	◇ アンドレイ源に関する記述。「ガガーリン公爵は，長崎に司祭の派遣を依頼する交渉をはじめたが，その司祭は，もっか不在の通訳者を養成するための学校を設立しなければならないと書いてきた。そのついでに，アンドレイ源（宣教団の仕事から逃げ出した神学士）を職場から追放したのはかれの不誠実と怠惰であったと指摘している。かれは新聞各紙に日本とロシアの衝突について書かれだしたころから仕事をしなくなっ

西暦	明治	日付	記載内容
			たとも言われるし，領事の求めに応じて新聞記事の翻訳を提出する代わりに，自分自身の作り話を提出したからとも言われている」（7 巻 p. 337-338）
		12/8	◇八戸等，青森県の現況。「八戸ではパウェル柴内〔秀正〕は要らないから，ふたたびイグナティ目時を派遣してほしいと要求しており，とりわけ地元の若者たちがそのことで騒いでいる。だが目時は公会前に「まったく不毛の地」だからという理由で，自ら希望して八戸を去ったのである。ボリス山村〔雄五郎〕神父は八戸の信者たちの依頼を叶えてやってほしいと頼んでいる。よかろう。ふたたび伝教者を入れ替え公会前と同じにする。つまり柴内が三戸，目時が八戸である。おそらく八戸はこれで少しは活気が戻るかもしれない。　ボリス山村神父の教会巡回についての詳しい報告。今年は極端に人が少ない。昨今の日露の軋轢が布教活動を妨害していることはあきらかだ。洗礼もなければ活気もない。ただ，現在ロシアでロシア語を勉強している陸軍少佐オデキ〔小関？〕の妻が，きっと弘前の女学校の教師仲間であろう，知り合いのプロテスタントの女性信者を正教に改宗させようと骨折っているだけである」（7 巻 p. 338）。なお，「小関」については別の箇所で，彼がスパイとして正教徒になった疑惑が記されている（8 巻 p. 248-249）
1904	37	3/1	●衆議院議員選挙で，青森県の郡部で関春茂が憲政本党から初当選し，一期四年代議士をつとめる。
		4/3	◇八戸の教会について。「聖体礼儀のあと，わたしの部屋に数人の客が立ち寄ったが，その中に，八戸の信徒で国会議員の関がいた。関は八戸の教会堂について，教会堂はすっかり老朽化しており，まもなくとり壊されるだろうと言った。その教会の土地は借地で，地主が返してもらいたいと要求している。おそらく信徒たちは新しい教会を建てる方向にいかないだろう。信徒数は少ないし，かれらのところには伝教者がこれまで四人（源，井河，久保，白井）もいたのだが，熱心な信徒はいない」（8 巻 p. 50）
		4/20	◇弘前の伝教者に関する記述。「弘前の伝教者ニフォント桶本〔喜太郎〕がこう書いてきた，「当地の異教徒たちは自分や信徒にいやがらせをしますが，自分はこの迫害をかえって喜んでいます。そのためにわたし自身も信徒たちも信仰が堅くなりました」。いかなる観点から現実を見るか，あるいはどんな眼鏡をかけて現実を見るか，なにごともそれ次第なのだ。どうか，ニフォント桶本のように見る人たちがもっと増えますように！」（8 巻 p. 60）。ニフォント桶本喜太郎は，長く大湯を担当した後，1902（明治 35）年から弘前を担当している伝教者。
		6/10	◇青森県地域の様子。「実際，戦争は教会の事業の大きな障害となっている。ボリス山村神父は管轄諸教会〔一関，青森，弘前など〕を巡回して手紙をくれたが，ほとんど稔りのない巡回の旅だったという。受洗者はほとんど一人もいない。痛悔者〔告解者〕はどこの教会もきわめて少ない。ところによっては一人もいない。ただ，最低の布教者と思われてる福岡〔岩手県二戸〕の副伝教者イオアン新田〔福造〕のところでは，全員が精進を守り痛悔した。新田のところでは洗礼も一年に八回もあった。これは他にほとんど例がない」（8 巻 p. 80）
		7/2	◇青森の受洗者のこと。「青森の伝教者シメオン松原〔清〕からの手紙によれば，一人の兵隊に洗礼を授けたという。この兵隊は全部で二〇日間シメオン松原から教理を聴いた。突然出征の命令がきたため，司祭をよぶ暇がなかった。しかし聴教者のその兵隊はぜひ洗礼を授けてもらいたいと願った。それでシメオンは決心して自分で，たとえば突然病気になった赤ん坊に授けるような略式の洗礼を授けた」（8 巻 p. 90-91）
		10/9	◇信者の訪問。「釜石，蟹田〔青森県〕，下総から信徒たちが訪ねてきた。訊くと，いまはどこも異教徒たちからの迫害はないという答えだった。どうやら信徒たちはみな，正教の信仰は愛国心と矛盾しないと確信できたようだ。少なくともそれが，戦争の与えた益だ」（8 巻 p. 126）
1905	38	7/31	◇正教会の教役者はこの頃，日露戦争の捕虜への対応に追われている。弘前にも捕虜収容所が設けられる。「恥辱に加えて，ロシアにとって新たな面汚しが走った。サハリンの一部を日本人が奪い取ろうとしているのだ。もちろん，どこにも日本人に抵抗する者などはいない。わが方は少数である。日本人はわが国の資源を手に奪わんとしているのだ。石炭だけでも，サハリンでは現在五億にもなる計算だという。ロシア人捕虜のうち，官吏とその妻子はこちらに移送されて，フランス領事に引き渡されたようだ。軍人は捕虜としてこちらのロシア人捕虜収容所に分散して送られた。ちなみに弘前にサハリンの捕虜用に新しい収容所が開設され，将校はそこへ収容された。兵士は五〇〇人ほどだが東京近郊の習志野に送られた」（8 巻 p. 210-211）
		8/20	◇ボリス山村神父が弘前，秋田方面の捕虜収容所の慰問に着手。「ボリス山村〔雄五郎〕神父が自分の管轄する諸教会を視察して回る途中，秋田でサハリンから来て収容されているわが捕虜たちを訪ね，内緒で手紙をよこした。秋田のかれらのところでも，弘前に収容されている者たちのもとでも働くつもりはあるが，その場合はロシア語を知っている輔祭が必要であると。そして，その輔祭の叙任に当たっては，神学校の課程を

西暦	明治	日付	記載内容
			終えた涌谷〔宮城県遠田郡〕の伝教者モイセイ白岩〔徳太郎〕を推薦してきた。わたしはこれに大賛成だ」(8 巻 p. 216)
		9/10	◇同上。「聖体礼儀を執り行ない，伝教者モイセイ白岩〔徳太郎〕を輔祭に叙聖する按手式をした。ボリス山村〔雄五郎〕神父とともに，サハリンで捕虜になった将校，兵士らが収容されている弘前，秋田，山形の捕虜のもとで奉事を行なうためである。かれは一週間ロシア語で奉神礼をあげる訓練を受け，その後ボリス神父のもとに向かい，神父とともに捕虜のところへ赴く」(8 巻 p. 220)
		9/20	◇同上。「輔祭モイセイ白岩〔徳太郎〕が奉神礼執行の訓練を終了した。そのため，きょう涌谷のボリス山村〔雄五郎〕のもとへ向かった。山村とともに奉神礼を執り行なうべく弘前，山形，秋田の捕虜たちを訪ねるためである」(8 巻 p. 222)
1908	41	11/4	◇八戸からの便りについて。「八戸〔の教会〕から共同で書いた手紙がきた。伝教者を派遣してくれるか，報奨金を定めてかつての伝教者でいまは八戸の信徒となっている者の一人を働きに迎えてもらいたいというものだった。言い換えれば，パウェル源に教会の給与を与えるということで，この源から上述の願いが出ているのだ。源は長年にわたって教会から騙し取ってきた。つまり，俸給を受け取りながら，教会のためにはまったくなにもしないのと同然だった。教会に少なからず悪を働いた。たとえば，自分の養子のアンドレイ源を教会のつとめから外し，長崎のロシア領事館に通訳として職に就かせている。アンドレイ源はこちらで教育され，その後サンクト・ペテルベルグ神学大学で教育を受けたのだったが。それもただ，あちらでは神学校の教師として，こちらで教会がかれに与えていたよりは少し多い給与がもらえるということだけの理由だった。こうして，いまパウェル源は，ロシア語の通訳として各地をごろごろしているこの養子の稼ぎで暮らしている。教会の財布にまた手を突っ込もうとしているのだが，不幸なことにこの財布は以前より中身がずいぶん少なくなってしまっている。パウェル源のような欲深さを秘めた老獪さと知恵が，だれかれのうちに増えてきているからだ」(8 巻 p. 363)
1909	42	2/5	◇弘前の伝教者の訃報。「弘前から伝教者のニフォント桶本〔喜太郎〕が亡くなったという電報が来た。葬儀代として一〇円を送り，函館の司祭アンドレイ目時〔金吾〕に電報で葬儀を頼んだ」(9 巻 p. 13)
		12/7	◇青森出身の医師に関する記述。「青森の若い医者イオアンが，浜松から青森に行く途中に立ち寄った。かれはメソジストだったが，正教に改宗を希望していた。試験をしてみて，教養の知識を充分に備えていることがわかったので，ロマン千葉〔忠朔〕神父が聖膏塗布を行ない，正教徒にした。かれの妻は正教会の女学校卒業生で，青森出身の信心深い医師パンテレイモン伴の姉にあたる。伴はいま浜松で勤めており，病気になった姉は現在パンテレイモン伴のところにいる。夫であるイオアンは浜松に妻を訪ねていったのである」(9 巻 p. 100)
1911	44	2/4	◇青森からの便り。「青森の伝教者シメオン松原〔清〕からよい便り。自分たちの教義に満足できずにいたあるプロテスタント教徒が，シメオンにより正教の教えを受け，家族とともに，われわれの教会に改宗することになったと書いている。さらに三，四人の聴教者がいて，洗礼も間近だという」(9 巻 p. 200)
		6/12	◇三戸出身のポリカルプ石井に関する記述。「ニコライ桜井〔宣次郎〕神父が手紙をよこし，旭川の伝教者ポリカルプ石井〔周太〕のところで一度に二六人が洗礼を受け，岩見沢のイサイヤ村木〔弥八〕のところでは一六人が受けたという」(9 巻 p. 230)
		6/17	◇八戸出身のペトル伴に関する記述。「セルゲイ座下が，その楽天的な性格にもかかわらず，佐沼の教会について手紙でひどく悪く書いてきた。伝教者のペトル伴〔義丸〕がすっかり怠け者になってしまったせいで，教会はまるで麻痺したかのようだという。祈祷には人が集まらず，こどもたちは祈祷を教えられておらず，洗礼は一度もおこなわれていないとのこと。悲しいことだ！」(9 巻 p. 231)
		7/1	◇セルゲイ師の教会巡回報告として，青森の伝教者シメオン松原に関する記述。「シメオン松原〔清〕はどうしたらいいのか。かれは青森でひどく嫌われているが，どこに行っても愛されそうもない」(9 巻 p. 236)
		9/25	●関春茂が，県会議員選挙に当選して県政にもどる。
		9/29	◇シメオン松原について。〔サハリンにいる〕セルゲイ座下から青森の教会についての手紙が来た。座下が青森に着くやいなや，信徒たちがそろって座下のところに集まり，伝教者のシメオン松原〔清〕について不平を述べたのだという。「かれがここにいるかぎりは教会には通わない」とのことらしい。「どういう理由なのですか」「松原は利子を取って金を貸したり，情事の仲介をしたりしているのです。それに，かれが取りもった結婚は不幸なことになります」ほかの理由は挙げなかったようだ。（中略）サハリンからの帰途に，〔青森で〕この件について最後までよく聞いてみるつもりだという。信徒らと松原とを和解させることができないようなら，かれを青森から異動しなければならないだろう」(9 巻 p. 252-253)

西暦	明治	日付	記載内容
		10/29	◇セルゲイ師は，ロシアから来た新しい宣教師ニコライ・クジミン師がサハリンのロシア人を司牧することになり，彼を伴っていくために青森で落ち合うことになっていた。上記は，その際の出来事。「弘前からセルゲイ座下が電報をよしこ，次の日曜の午前九時に青森でニコライ・クジミン師を待っているとのこと」（9巻 p. 248） ◇八戸，三本木に関する記述。「セルゲイ座下が，〔青森県〕三本木では布教が不十分であると嘆いており，八戸の伝教者，パウェル窪田〔行孝〕に手紙を書き，かれに毎月九日間だけ三本木に来てもらい，聴教を希望する者たちを教えてもらってはどうかと言ってきた。三本木への旅費と滞在費として月に五円送ってやってほしいという。すべてかれの手紙のとおりにした」（9巻 p. 259）

＊本資料は，平成29年度学校法人光星学院イノベーションプログラム補助金による「八戸におけるハリストス正教関連人物に関する調査と文献研究」の成果の一部である。